新事件

【断崖の眺め】

早坂暁

これもまた一つの
愛の眺めかもしれません。

新・事件

【断崖の眺め】

早坂暁

【断崖の眺め】 新・事件

一九八四年一一月二〇日 第一刷発行

著者—早坂暁 発行者—大和岩雄 発行所—大和書房

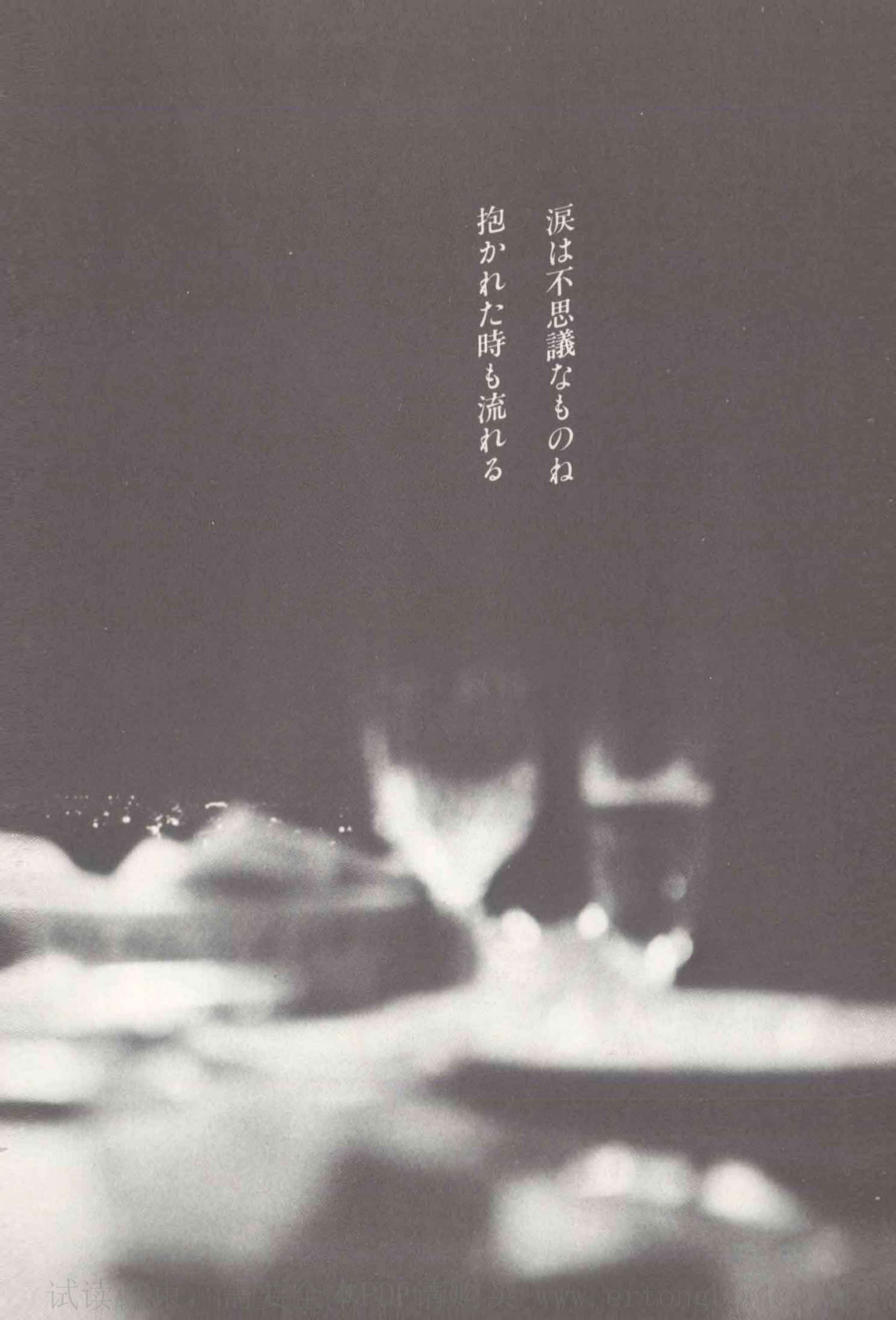
東京都文京区関口一—三三—四 郵便番号一一二
電話(二〇三)四五一一 振替—東京六—六四二二七

印刷所—暁印刷 製本所—東京美術紙工 ブックデザイン—市川英夫 写真—道元峯 イラスト—荒野直恵

©1984A.HAYASAKA Printed in Japan ISBN4-479-54027-X

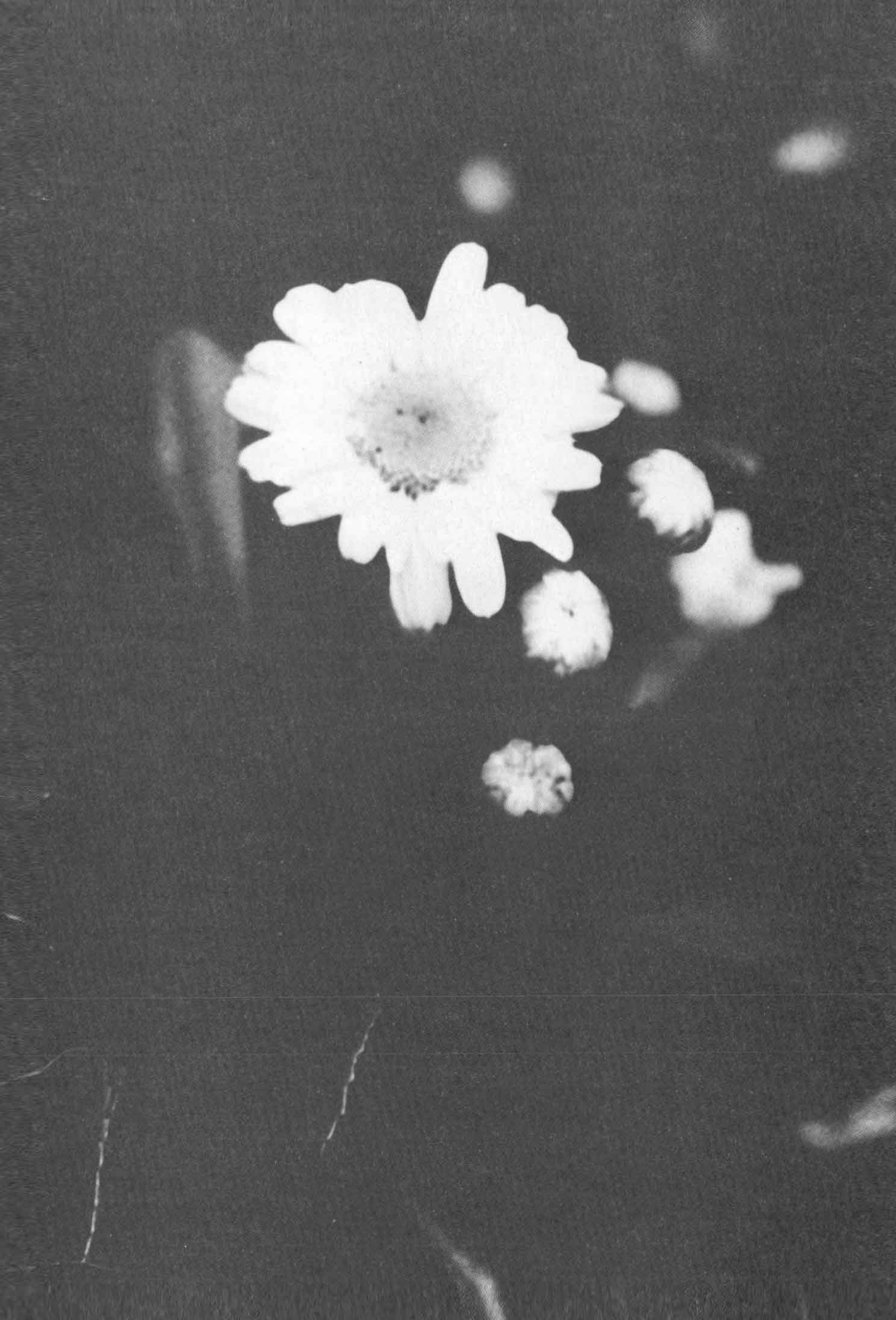
乱丁本・落丁本はお取替します。

新・事件
【断崖の眺め】
早坂暁


涙は不思議なものね
抱かれた時も流れる

目次

第①章 風は海から吹いてくる 9
第②章 都会の断崖で 39
第③章 そして、愛の眺め 65
第④章 トルコ石に涙のせたら 93
第⑤章 瞳をとじずに 117
第⑥章 涙は愛の耳飾り 141
あとがき 178



らららららら　ゆらり
らららららら　ほろり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第1章――風は海から吹いてくる

●夜の東京

美しく、何千、何万の灯が、きらめいている、夜の東京の眺め。
そして高層ビル群。
それは、都会の断崖にも似ている。
「あーっ！」
女の悲鳴が長く尾を引いて――。
コンクリート路上に倒れている女の体。
菊地大三郎の声『この東京では、高いビルからの飛びおり自殺が年二百件以上もあるそうです』

●高層ビルで

最上階のレストラン。
展望のきく窓辺の席に、菊地大三郎と、娘の志那子が坐っている。
窓に顔を寄せて、夜景のパノラマを見ている菊地。
菊地「……海だな。海」
志那子「え？」
菊地「小さい時、死んだ親爺に、瀬戸内海に連れて行かれたことがあった」
志那子「瀬戸内海……」
志那子は、返事をしながら、菊地の襟元を直したりしている。菊地は珍らしくフォーマルな恰好をしているのだ。
菊地「ああ、夜の瀬戸内海でね、舟が進むと夜光虫がキラキラ光って、ちょうどこんな眺めだった……」
何万という灯が広がっている。
菊地「……なんとなく、飛びおりてみたくなるなあ」
志那子「ナニ馬鹿なこと言ってるのよ。ほら、ちゃんとこちら向いて下さい」
ネクタイを直す。
志那子「どうして、お父さんのネクタイは曲ってしまうの」
菊地「きっと根性が曲っているんだろう」
志那子「結局、散髪に行かなかったんでしょ」

手を菊地の髪にのばす。

菊地「いいよ、もう」

志那子「あ、来た……」

レストランの入口に花井武志と、中年の女性――

今泉信江(48)が現われる。

菊地「！」

落ちつきなく立ちあがる。

武志が案内してテーブルに来た。

信江「遅れまして、誠に申し訳ございません。今泉信江と申します」

菊地「あ、私は……（と言いかけて武志に）いいんだね」

武志「え？　ああっどうぞ」

菊地「私は菊地大三郎です。弁護士をしております」

志那子「娘の志那子です。どうかよろしく」

おなかが大きい。

信江「あら」

志那子「六ヶ月です」

信江「六ヶ月……どうですか、具合は？」

志那子「あの、産婦人科なんですか」

信江「前は産科にいましたけど、今は外科病棟です」

武志「ま、お坐りになって下さい」

みんな立ったままだ。腰をおろす。

チーフボーイがくる。武志が、すぐはじめてくれるよう頼んでいる。

信江「出かけようとした時に、緊急の患者さんがはこびこまれまして、本当にお待たせしてすみませんでした」

菊地「いや、病院は大変ですなあ」

武志「おじさん、こちらは外科病棟の婦長さんなんです」

菊地「婦長……」

信江「わたしみたいなボーッとしたのは、外科には向かないんですけど」

ボーイがスープを運んできた。

一同、ナプキンをかける。

菊地「……」
菊地の声『五十三歳になって、お見合いをしようとは、
夢にも思わなかったことでした』
カメラは、窓外にひろがる大東京の夜景をとらえる。
遠くで、救急車とパトカーのサイレンが聞える。

●同じくレストランで

デザートが出て、食事が終ろうとしている。
アイスクリームを膝の上に落としてしまう菊地。
志那子「お父さん……」
菊地のナプキンは床の上におちている。
拾って菊地のズボンを拭く志那子。
菊地「いいよ、自分でやるから」
信江「……」
なんとなく可笑しい。ボーイ長が来て、武志にささやく。
武志「!」
見るとレストランの入口で、若い女性が会釈している。
——谷崎薫(22)。
武志、立って行く。
菊地も気がついた。
菊地「あ……いらっしゃい、こっちへ」
武志と薫、何か話している。
菊地「どうした、いらっしゃい」
大きな声を出すものだから、まわりの客がこちらを見ている。
志那子「お父さん……」
武志と薫が、こっちへやってくる。
信江「お嬢さん?……」
菊地「いや、娘はこれ一人きりです」
信江「あ、そうでした、すみません」
薫が来た。
薫「すみません、明日の朝にしようかと思ったのですが……」

菊地「なにかあった？」

薫「前川さんから電話がありました。急病で、あしたの法廷に出るのは、無理だそうです」

菊地「急病……ちょっとまずいなあ」

薫「どうしましょうか」

菊地「いや、ありがとう、法廷は午後からだから、朝一番に手を打ちます」

薫「そうですか、よかった。じゃ、これで」

菊地「あ、折角だから、食べていきなさい」

薫「いえ、私はもう済ませました」

菊地「紹介します。うちの事務所に配属された司法修習生の谷崎薫君です」

薫「谷崎です」

信江「今泉です。はじめまして」

菊地「研修には関係ないが、ま、東京の夜景でも眺めなさい。もう見たことがあるか」

薫「いいえ、はじめてです。……きれい」

信江「司法修習生？」

菊地「そうです。司法試験に合格した何百人かが、えーと、今年は何人？」

薫「は？　四百五十一人です」

菊地「各弁護士のところに散らばって、実地に研修するわけです」

信江「お医者さんのインターンと一緒ですね」

菊地「そうです、そうです、インターンです」

信江「お若いのに、優秀なんですねえ」

菊地「今年は女性が……えーと、何人でしたか、女性は」

薫「四十二人です」

信江「こういう方を見ていると、なんだか嬉しくなります。私たちの頃は、女で働くと言っても、看護婦とか、教師とか、ごく限られていましたから」

菊地「何かお茶でも取りなさい」

武志「叔父さん、ぼくたち、も一つ上の展望室へ行ってみます。志那子、行こ」

志那子「あ、また、あとで」

薫を引き立てるようにして、席を離れる。
菊地「おい、ここでもよく見えるじゃないか……」
みんな行ってしまった。
信江「………」
菊地「………」
急に二人とも、無口になってしまった。
菊地「あのう」
信江も、何か言おうとして、
菊地「どうぞ」
信江「いえ、どうぞ」
菊地「あ、そうですか、では。……さっきご覧のように、娘は結婚しまして、亭主の勤務の都合で札幌のほうに行っております」
信江「札幌へ……」
菊地「私が一人になったものですから、やたら心配します。いや、私は一人になって大いに解放された気分で、事務所にベッドを置いて泊ったりしておるのが、どうも気に入らないようで、それでまあ、結婚をしろ、結婚をしろと、うるさく攻めたてられましたのです」
ハンカチをポケットの奥から取り出して、汗をふいている。
信江「あの、それ……」
菊地「ああ」
お守り袋で、汗をふいていたのだ。
菊地「ちょっと固いと思いました」

●夜の展望ルームで

淡い照明。
大きな一枚張りのガラスの壁面がある外は、見事に広がる大東京の夜景。
志那子、武志、薫らが並んで眺めている。
志那子「いい感じの人ねえ」
武志「な、いいだろ」
志那子「うまくいくといいわねえ」
薫「病院関係のお人ですか」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com